

## エネルギー問題と学界

赤 松 秀 雄

H E S S も発足以来第 4 年目を迎えるに至りました。その間エネルギー問題の重要性は次第に認識を深め一般世人の関心もようやく高くなってきました。しかるに、そのなかで気になるのは、いわゆる学界の関心の程度であります。私は化学やですから、化学の場合を例にとります。近く 4 月に行われる日本化学会の年会では 3 0 0 0 件を超す研究報告が予定されています。ところが、プログラムをみる限りでは、あきらかにエネルギー問題と取り組んでいると見られる研究報告は見あたりません。これはどう言うことなのか、はなはだ気になることです。エネルギー問題に対する化学者の認識が足りないのか、それとも今日的な学問研究の対象となりにくい面でもあるのでしょうか。

これに反して環境問題に関する研究報告は極めて多数みられます。それに当然のことですが、実はこれに至るまでの社会的または時間的経過のあとを振りかえてみると、これまた気になる次第です。学界は外からの要請に追いたてられ、またはそのあとを追ってのみきたようにも思われるからです。

文明の基盤にかゝわるような大きい問題を、その担い手であるべき学界が自ら予見し、率先して指導性をもつ傾向が失われつつあるようにみられます。それとも今日の学術体制に何か原因があるのかもしれない。いずれにせよ学界のエネルギー問題に対する関心の持ち方は未だ地についているようには思われません。日本化学会では企画構想委員会を設けて、化学に問われている諸問題をとりあげて、その報告を発表しています。幸いにして近く「エネルギー問題と将来動向(仮称)」について報告する由であります。その報告に期待します。

学界のみを批判することもできません。H E S S の活動にしても反省すべき点は少なくないと思われまゝ。「水素」のもつ意義を奨揚して学界にもよびかける態度は必しも十分であったとは思われません。2 年間会長をつとめた後、このたび会長の責めを免ぜられるにあたって反省する次第であります。( 52.3.21 )